

## 豊子愷訳『伊勢物語』について

徐, 迎春  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/25267>

---

出版情報 : 文献探究. 48, pp.64-77, 2010-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 豊子愷訳『伊勢物語』について

徐 迎春

## 一 執筆時期及び契機について

豊子愷（一八九八～一九七五年）は、中国で画家として著名であるが、今日では翻訳家としても知られている。就中、彼が訳した『源氏物語』<sup>①</sup>は、今もなお人気が高い。

豊子愷は『源氏物語』以外に、『落窪物語』『竹取物語』『伊勢物語』をも中国語に訳している。それらの執筆時期は、『豊子愷文集』巻七<sup>②</sup>に収められた彼の書簡から窺える。一九七二年十月二十日、息子の新枚宛ての手紙に、次のように書かれている。

此间、用不満足の心来说，是岑寂无聊，用满足的心来说，是平安无事。我是知足的，故能自得其乐，翻译日本王朝物語（一千年前的），已有三篇，今正译第四篇，每篇皆有十余万言，

【今、不満を言うなら物寂しく退屈なことだ。満足を言うなら、平穩無事なことだ。私はこれで満足している。これでいいと思う。日本王朝物語（千年前のもの）を訳している。すでに三作品の翻訳は終わっている。いま四つ目の作品を訳している。どの作品も十万字以上になる。】<sup>③</sup>（二）の日本語訳は筆者による、以下同じ。）

一九七二年と云えば、中国では文化大革命（一九六六～一九七六年）の真つ只中である。文化大革命時、多くの文化人及び政治家が批判された。知識人である豊子愷も批判の対象を免れ得なかったことが書簡から読み取れる。彼は、慰みに日本の物語を訳し始めたが、一九七二年には既に三作品の訳を完成し、続いて四つ目の作品の翻訳に取り組んでいたのである。

ちなみに、この三作品について『豊子愷文集』の編集者は脚注において、

《源氏物語》和上述三篇（《竹取物語》、《落窪物語》、《伊勢物語》）译作，已于八十年代初期由人民文学出版社先后出版。第四篇未见译稿。

【『源氏物語』と上述の三作品（『竹取物語』『落窪物語』『伊勢物語』）の訳は、八十年代の初め頃、立て続けに人民文学出版社から出版された。ただ四つ目の作品の訳稿は見つからなかった。】

と記しており、前掲の豊子愷書簡中の「三作品」とは、『竹取物語』『落窪物語』『伊勢物語』であるとす。

ここで、文化大革命が続く不安定な社会状況下、慰みとは言え、何

故豊子愷が特に『落窪物語』『竹取物語』『伊勢物語』の三作品を選んで訳したのかという疑問が生じる。また、訳稿が見つからなかった四つ目の作品とはどのような作品であったのだろうか。

幸運にも豊子愷が訳した『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』の原稿は保存され、『落窪物語』という書名で一九八四年に人民文学出版社から出版された<sup>(3)</sup>。その喜びと感動を、娘の豊一吟は「父の最後の一冊の本」<sup>(4)</sup>において、次のように綴った。

《落窪物語》（人民文学出版社出版、丰子愷译）一书终于问世了。

望着这本书，顿觉往事历历在目，思绪万千！①这是我父亲在1970~1972年所译的。（中略）②继上世纪60年代上半期译完日本古典名著《源氏物语》之后，他原来就打算再译出比《源氏物语》更早的两部物语和略晚的两部物语（『物语』在日文里是故事的意思），但因『文革』开始而没有遂愿。他始终把这件事放在心上。1970年初，父亲因下乡劳动而生了一场大病。病愈后，他就开始从事这些物语的翻译。（中略）他写信给那时还在石家庄的我的弟弟新枚说：“……翻译日本王朝物语（一千年前的），已有三篇，今正译第四篇，每篇皆有十余万字，文革前完成的《源氏物语》有九十八万言，乃最长篇。……”③这第四篇是指《狭衣物语》，后来终于没有译成。（文中の番号と傍線は筆者による、以下同じ。）

【『落窪物語』（人民文学出版社、豊子愷訳）はやっと出版が叶った。本を見る瞬間、昔の事が目の前に躍然と浮かんで来た。心はその思いでいっぱいだ！①これは、父が一九七〇〜一九七二年に訳したものだ。（中略）②六〇年代の前半に日本の古典名作『源氏物語』を訳した。その後、父は『源氏物語』以前に書かれた物

語（日本で「物語」はストーリーの意味である。）を二作品、さらに『源氏物語』よりやや成立時期が遅い二作品を訳す計画であった。しかし、『文化大革命』が始まったから、その計画は実行できなかった。彼はずっとこのことを気にしていた。一九七〇年の初め頃、父は田舎に下放され、肉体労働の疲れによって大病を患った。快復のあと、彼はそれら物語の翻訳作業に取り組んだ。（中略）その時まだ石家庄にいた弟の新枚に次のように書き送った。「……日本王朝物語（千年前のもの）を訳している。すでに三作品の翻訳は終わっている。いま四つ目の作品を訳している。どの作品も十万字以上になる。文化大革命の始まる前に訳が完成した『源氏物語』は九十八万字になる、一番長いものだ。……」

③この四つ目の作品は『狭衣物語』だが、最後まで訳せなかった。傍線①で『落窪物語』など三作品の執筆の開始が一九七〇年であると明かしている。更に傍線②から、『落窪物語』等四作品を翻訳する取り組みは、『源氏物語』訳後の豊子愷の計画であったことが分かる。一つの優れた作品の誕生は、その前後の作品と密接な関係を持つ。それを知る豊子愷は、『源氏物語』が書かれた契機、及び『源氏物語』が後の作品に及ぼした影響に興味を持つようになり、『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』を訳す計画を立てたと考えられる。

また、計画中の四つ目の作品は傍線③から、『狭衣物語』だと分かる。これらの情報は、豊が『落窪物語』等四作品を訳した際に、参照した訳注書が、上記の四作品が収録される叢書であった可能性、あるいは、この四作品が一冊に収まる書籍であった可能性を示している。

## 二 豊子愷記念館所蔵の『王朝物語集』(一)について

既に述べたように、豊子愷が一九七〇から一九七二年に掛けて訳した『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』は、一九八四年に『落窪物語』という書名で出版された。その見開き扉には、

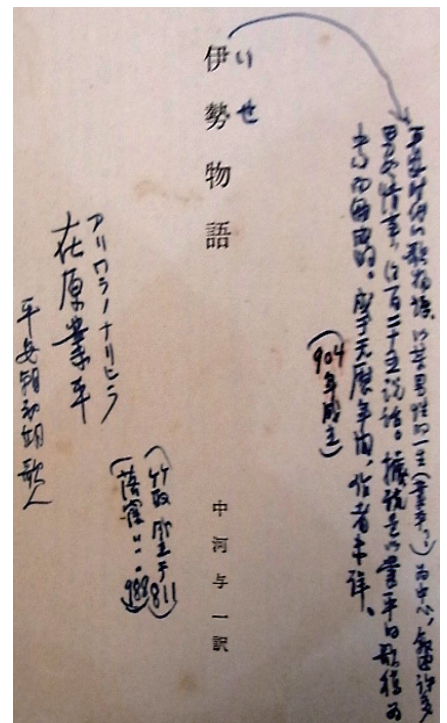
根据《王朝物語集》(一) 河出書店 一九五九年版翻译

【『王朝物語集』(一) (河出書店、一九五九年) によって訳した。】と記されている。

『王朝物語集』(一)は一九五六年六月に河出書房から出版され、『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』『狭衣物語』の四作品を収録する。ここから、前掲書簡中に豊子愷が言う「日本王朝物語」とは、『王朝物語集』(一)であったことが判明する。ただし、出版年と出版社は一致しない。

筆者が豊一吟に直接聞いたところでは、右の見開き扉の記述は出版社側が付したものだという。河出書房は、一九五七年五月に河出書房新社に名称が変わる。つまり、豊子愷が仮に一九五九年刊の『王朝物語集』(一)を参照したとすれば、河出書房ではなく、河出書房新社のはずである。

そこで、豊子愷記念館に所蔵される『王朝物語集』(一)を確認すると、一九五六年十月十五日に河出書房から出版された再版のものであった。しかも、そこには(図1)のように、



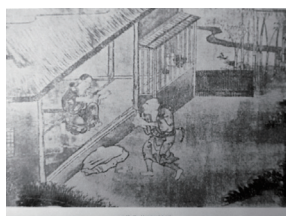
(図1)

豊子愷による書き入れが散見された。『伊勢物語』について、「平安時代の歌物語。以某男性的の一生(業平?)为中心、叙述许多男女情事。约百二十五说话。據说是以業平的歌稿为中心而编成的。成于天曆年間、作者未详<sup>(5)</sup>。【平安時代の歌物語である。或る男性(業平?)の一生を中心に、多くの男女の情事を叙述する。約百二十五の說話からなる。業平の歌稿を中心に編纂されたという。天曆年間に成立、作者未詳。】と書き込まれており、「天曆年間」の左横に何故か「904年成立」と記す。更に「在原業平 アリロノナリヒラ 平安朝初期歌人」と記した下には、現在は成立未詳とされる『竹取物語』と『落窪物語』の成立年代をメモしている。

一九五九年刊『王朝物語集』(一) (河出書房新社) は、豊子愷記念館所蔵の一九五六年十月十五日刊『王朝物語集』(一) (河出書房) と内容が一致する。豊子愷が一九五六年刊と一九五九年刊を同時に所有していた可能性もあるが、(図1)に見える一九五六年刊『王朝物語集』(一)に散見される豊子愷の書き入れから判断すれば、一九八四年に

出版された豊子愷訳『落窪物語』の見開き扉に見える記述は、出版社側の誤記である可能性も否定できない。

また、豊子愷訳『落窪物語』には、以下の三つの図を載せる<sup>(6)</sup>。



(図2)



(図3)



(図4)

(図2)が『竹取物語』(『竹取物語』挿絵)、(図3)が『伊勢物語』(在原業平像)、(図4)が『落窪物語』(『落窪物語』挿絵)である。

一方、一九五六年刊『王朝物語集』(一)にも、(図5)が示すように、

『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』『狭衣物語』の図が掲載されており、『狭衣物語』の図を除くと、両書の図はまったく一致している。豊子愷訳『落窪物語』所収の図は、『王朝物語集』(一)から転載したことが明らかである。

以上、豊子愷の書簡及び豊一吟(父)の最後の一冊の本、更に記念館所蔵『王朝物語集』(一)によって、豊が

『落窪物語』等四作品の訳を行った際に参照した図書は、一九五六年十月十五日に出版された『王朝物語集』(一)であったとして間違いあるまい。

### 三 章段分け及び独特な訳文について

さて、豊が『王朝物語集』(一)に収録されている『伊勢物語』を参照していたことが判明したわけであるが、このことを踏まえて、次に、豊による『伊勢物語』の中国語訳(以下、『豊訳』と略称する。)がどのような訳であるか、彼の訳文を精査して検討してみたい。

『伊勢物語』は通常、第一段、第二段のように、「段」をもって呼称するのが習わしだが、『豊訳』では第一話、第二話のように、「段」を「話」とする等、独特の訳し方をしている。更に、章段分けにおいても、今広く行われている天福本の章段分けとはいくつかの相違が見られた。その相違は第八話において、発生する。

天福本『伊勢物語』の第八段は、次のとおりである。

むかしおとこ有けり京やすみうかりけんあつまの方にゆきてすみ所もとむとともとするひとひとりふたりしてゆきけりしなのゝくにあさまのたけにけふりのたつをみて

ぬ

しなのなるあさまのたけにたつ煙をちこち人のみやはとかめ

ところが、『豊訳』の第八話は、



从前有一个男子，他认定自身在京都都是个无用之人，不想再住下去，便希望到寂寥的东国去找求自己可住的土地，出门旅行去了。他在途中眺望信浓国的浅间岳上升起的烟云，咏歌如下：

信浓山下青烟起，远国行人入眼愁。

原有一两个朋友相偕一同旅行，然而没有一个人能充当赴东国的领路人，前途茫茫地一路行去，信步走到了三河国的一个叫八桥的地方。

【昔、ある男が、自分は京都では無用の人間だと判断して、もうここには住みたくないと思つた。そこで寂寥たる東国へ行き、自分が住める場所を探すことを望んで、旅に出た。旅の途中で、信濃の国にある浅間の嶽に立ち上がっている煙を眺めて、次のように詠んだ。

信濃の山の麓に青い煙が立ち上がっている、遠国の旅人がそれを  
れを見て憂愁する。

古くからの友達二人二人を伴つて旅に出ている。しかし、東国の道を案内できる人は一人もいなかった。迷いながら行き着いた所が三河の国の八つ橋というところだった。】

とあり、「信濃の山の麓には」（信浓山下）という歌に続く「古くからの友達一人二人」（原有一两个朋友）以下の文章は、天福本の第八段には見えない。

そこで、続けて天福本の第九段をみると、次のようにある。

むかしおとこありけりそのおとこ身をえうなき物に思なして京にはあらしあつまの方にすむへきくにもとめにとてゆきけりもとよ

り友とする人ひとりふたりしていきけりみちしれる人もなくてま  
とひいきけりみかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ

細部の異同は別として、『豊訳』の第八話は、天福本の第八段と第九段を合わせた恰好となる。その結果、『豊訳』は第八話から天福本と一段ずつずれが生じる。従つて、『豊訳』の第九話は天福本の第十段になる。

その一方、天福本の第百十一段が、『豊訳』では第百十話と第百十一話に分かれているため、第百十二話以降は再び天福本と段序が一致するようになる。これら、『豊訳』に見られる特異な段構成は、独自のものなのであろうか。

そこで、豊子愷記念館所蔵の『王朝物語集』（二）に収録されている『伊勢物語』を参照すると、本書の現代語訳は中河与一による（以下『中河訳』と略称する。）ものである。『中河訳』は、角川文庫として昭和二十八年（一九五三）に出版された中河与一『伊勢物語』に基づく（以下、『訳注』と略称する<sup>⑧</sup>）。『訳注』の前半は本文と脚注から成り、後半は現代語訳であるが、その現代語訳には本文の脚注とは別に八箇所注解が付されている。『王朝物語集』（二）に収録されたのは、後半の現代語訳と注解のみである。『訳注』は前半の本文において普通「段」と称しているが、後半の現代語訳になると、「段」を「話」と称している。『王朝物語集』（二）に収録される『中河訳』でも、やはり「段」を「話」と称している。その第八話を次に引用する。

むかし、或る男があつた。その男はわが身を都には無用の者と思いきめてしまつて、都にはもういたくもない。淋しい東国に自分

の住むべき土地を見いだそうと思つて、旅に出た。道すがら信濃の国の浅間が嶽の立ちのぼるのをながめて次の歌をよんだ。

信濃なる浅間のたけに立つけぶり 遠方人の見やはとがめぬ  
(信濃の国の浅間が嶽に立つけぶりは 遙か遠くの路ゆく旅人にも 眼につかぬことはあるまい。あのけぶりを見ると何ともいへぬ淋しさが身にせまる。)

言うまでもなく友達の一人二人は道連れにして一しよに旅立ったのであるが、たれ一人、東国への案内のできる者とはなく、行くさきさき迷いながら旅して行つた。そして三河の国の八ッ橋と云うところにたどり着いた。

これを見れば、豊が『中河訳』を参照して中国語訳を行つたことは、一目瞭然である。ただし、豊は『中河訳』の「浅間が嶽」を「浅いところの嶽」と理解したらしく、その誤解が歌の解釈にまで及んで、歌の第二句「浅間のたけに」を「山の麓」(山下)と誤訳させることとなつた。

豊子愷は『中河訳』によつて、「段」を「話」と称し、また、章段分けにおいても『中河訳』に従つたことから、今の天福本とは相違する恰好になつてしまつたわけである。

更に、細かい訳文にも、『豊訳』と『中河訳』とで一致が見られる。

例えば、第八十一話は、惟喬親王が水無瀬に別荘があつて、毎年桜の盛りに訪れたという。そして、

いま狩する交野の渚の院の桜におもしろし。

と、今狩りしている交野の渚の院の桜が殊に素晴らしいと述べられている。ところが、『豊訳』は、

有一天出猎，来到一个叫做交野的洲渚上，看见那里有一株梅树，  
姿态窈窕可爱，

【ある日、狩に出掛けて交野の渚というところにまで来た。そこに一本の梅、とても美しくしとやかで可憐であつた。】

のように、『伊勢物語』の本文の「桜」を「梅」に訳している。池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』の校異を確認しても、この本文は「桜」であつて、「梅」ではない。そこで『中河訳』を確認すると、

ところで今狩りに来ている交野という所の渚の院の梅が一入奥床しく風情があつた。

の如く、「桜」を「梅」<sup>9)</sup>と誤訳している。この誤訳がそのまま『豊訳』に継続されてしまつたのである。

また、第九十二話は、高貴な女性を思慕する身分の低い男が、その思いが届きそうもないことを悩んだあげく、

おふな／＼思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり

と詠むが、この歌の後に、

むかしもかかる事は、世のことわりにやありけむ。

という評が付される。ところが、『豊訳』にはこの評がない。

池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』には、諸本に異同は見られるものの、どの系統の本文にもこの評は存在する。しかし豊が参照した『中河訳』にはこの評が見えない<sup>10)</sup>。豊は『中河訳』によつたために、『伊勢物語』にもともと備わる本文を訳していなかったのである。これは、豊の手許に『伊勢物語』の本文を載せる訳注書がなく、参照した『伊勢物語』の訳注書が『王朝物語集』(一)に収録されている『中河訳』のみであったことを示唆する。

ところが、中村真一郎の「中国訳『源氏物語』のことなど」<sup>11)</sup>には、やや異なる情報が記されている。そこには次のようにある。

父の子愷氏の遺作であるとして、『竹取物語』と『伊勢物語』と『落窪物語』との翻訳の合本を、土産に持参してくれた。私は早速、そのタイトル頁を開き、そこにある注意書から、『伊勢』の翻訳には、私がかつて行つた現代訳が参考にされていることを発見し、それを一吟さんに教えたことから、忽ちお互いは旧知のような親しみを覚えるに至つた。

豊一吟が中村真一郎のもとに持つてきた『伊勢物語』を含む合本は、恐らく豊子愷『落窪物語』であろう。そして、その「注意書」に「私がかつて行つた現代訳が参考にされていることを発見し」と中村真一郎は言う。しかし、『王朝物語集』(一)に収録されている彼による現代語訳は、豊子愷が最後まで訳せなかつた『狭衣物語』のほゞである。その「注意書」には何らかの誤記でもあつたものであろうか。

ちなみに、中村真一郎のいう自身による『伊勢物語』の現代語訳とは、一九六九年に河出書房新社から出版された日本文学全集4(カラ―版)に収まるもので、中村はそれと勘違いしたのかも知れない。また、そこには、『伊勢物語』の他に、『竹取物語』『枕草子』『徒然草』が収録されている。更に、そのなかで、中村真一郎による『伊勢物語』の現代語訳は、『中河訳』と違って天福本に拠っているので、章段分けからして『豊訳』と違うのである。

#### 四 後人注記と脚注について

以上より、章段分けから細かい訳文に至るまで、『中河訳』が『豊訳』の拠り所であつたことが明らかになつた。しかし、豊は、『中河訳』をすべてそのまま訳したわけではない。

例えば、天福本には第三段、第五段、第六段、第四十四段、第六十五段、第七十九段等に、所謂後人注記と呼ばれる文がある。しかし、『豊訳』から確認できるのは第三話と第六話にある後人注記のみである。

後人注記について、中河与一は『訳注』の凡例において、

本書の本文は藤井高尚の「伊勢物語新釈」の本文を底本とした。但しカッコ( )によつて第三段と第六段との末尾に一例として流布本による一節をつけた。もつて流布本の様子を示し、この物語に対する古来の好尚を彷彿せしめた。

と断っている。すなわち、後人注記は藤井高尚の『伊勢物語新釈』を



底本としたため、切り捨てられた恰好であるが、その中の第三話と第六話のみ流布本に従って補い、括弧内に示したと述べている。このような説明は『王朝物語集』(一)に収録される『中河訳』には見られないが、『中河訳』は『訳注』の現代語訳を独立させたものであるので、第三話と第六話には後人注記が見られる。

例えば、『中河訳』の第三話では、

(これは二条の后が まだ清和天皇に御奉仕なさらないで、普通の身分であられた時のことである。)

のように、括弧内において後人注記を示している。

『王朝物語集』(一)に収録される川端康成による『竹取物語』の現代語訳では、原文にない訳を括弧を用いて示し、豊はそれらを様々な形で訳出した<sup>10)</sup>。それに対して、『中河訳』は『訳注』凡例から分かるように、括弧を用いて示したのは後人注記のみである。よって、同じく『王朝物語集』(一)に収録されるにも関わらず、両訳において括弧の示す意味は異なる。この括弧を豊はどのようなように処理したのだろうか。まず、第三話の後人注記を『豊訳』では、

这是二条皇后尚未侍奉清和天皇而还是普通身分的女子时的事。

【これは二条后が未だ清和天皇にお仕えしなかつた時の出来事であつた。】

のように、『中河訳』の括弧表記を、そのまま訳文中に取り込んで訳出した。この処理により、訳者中河与一の流布本の様子を一部再現する

という意図に沿った『伊勢物語』の訳文となった。

それに対して、同じく括弧で示されている『中川訳』の第六話の後人注記を、『豊訳』は次のように訳出している。

说明：这是二条皇后在她的当女御的堂姐宫中当侍从时的事。这二条皇后气品高尚，容貌美丽。因此有一个人背负了她，逃出宫去。她的哥哥堀河大臣藤原基经及其长子国经大纳言，那时候身分还低微，这一天进宫去，在途中听见一个女子痛哭的声音，便把她换回来，一看，原来这女子是他的妹妹，便把他带了回去。前文说有鬼，便是暗指此事。这时候这二条皇后年纪还轻，还是普通人的身分。

【说明：これは二条后が従姉の女御のところ仕えていた時の出来事であつた。二条后は、気品が高く美しかったので、ある人が二条后を背負つて、宮中を逃げ出した。二条后の兄である堀河大臣の藤原基経及びその長男の国経大納言は、その時まだ身分が低かつた。この日、宮中に参内する途中、女の泣き声が聞こえた。呼んでみると、自分の妹だったので取り返した。前に、「鬼がいる」と書いたのは、この事を暗示している。その時、二条后はまだ若く、普通の身分の人であつた。】

括弧を「説明」として訳出しているが、豊は第六段の文章の流れから、括弧内の後人注記を、第三話の場合とは異なり、第六話についての説明だと判断して、このような処理をしたと考えられる。というのも、『中河訳』には注解が八箇所あり、それらは本文の最後に細字で「注」として付されているため、注解と区別する為に「説明」という言葉を用いたのだろう。

ただし、豊は『伊勢物語』本文の「御兄堀河大臣、太郎國経大納言」を、「二条後の兄である堀河大臣の藤原基経及びその長男の國経大納言」のように、國経を基経の息子と訳している。これは、『中河訳』の当該箇所、

(……これは二条の后がいとこの女御の御所にお仕えするような形でおられた時、容姿上品で美しくあられたから連れだして背負って逃げたのを、その兄の堀河大臣藤原基経や、その長男の國経大納言がまだ低い身分の頃であつたが、……)

を直訳したものと思われる。豊は『中河訳』の「その長男の國経大納言」の「その」が指す対象を基経だと判断して、國経を基経の息子と訳したのである。

これら、『中河訳』の第三話と第六話に付されている括弧中の後人注記の処理に、豊の翻訳姿勢が窺える。そこには、底本をそのまま訳すというのではなく、読者を常に念頭において、読者に分かりやすい訳を旨指す意図が看取される。

同様の姿勢は『豊訳』の脚注にも見られた。

『豊訳』には、十一箇所に脚注が付されるが、その中の七箇所には「原注」との注記があり、残りの四箇所には何も書かれていない。その違いは何に由来するのであるのか。

例えば、第七十八話の、

むかし、氏のなかに親王うまれ給へりけり。

の「氏のなか」を、『豊訳』では、

所謂同姓氏，应是指在原氏。——原注

【ここで言う「氏」とは、在原氏を指すべきである。——原注による。】

のように、「原注」を参照して付した注解だと記されている。ここを『中河訳』と照合すると、

(注)「氏のうち」——在原氏をさすなるべし。

とあり、豊の脚注は右の注解を参照したものと分かる。つまり、『豊訳』の「原注」とは『中河訳』の(注)である。

しかし、『豊訳』の脚注には「原注」と示さなかった箇所が四例ある。

例えば、第二百十話は、昔ある男が自分の言い寄った女がまだ恋愛した経験がないと思っていたところ、実は言い交わす人があったことを聞いて、暫く時間が経過した後、「近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の数見む」という歌を遣ったと述べられる。『豊訳』では、その「筑摩祭」について、次のような解説を行っている。

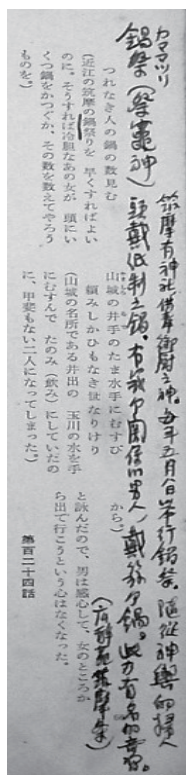
筑摩地方有一神社，供奉御厨之神。毎年五月初八，举行锅祭，许多妇女随从神輿在街上巡行，头戴纸制的锅子，有几个情郎，头戴几个锅子。这是一种有名的奇怪风俗。

【筑摩には、御厨の神を祭る神社がある。毎年五月八日に、鍋祭が行われる。多くの婦人が神輿に従って、紙で作った鍋をかぶつ

て町を歩く。何人の恋人を持つかによって、何個の鍋をかぶる。これは奇怪な風習として有名である。】

右の脚注により、中国の読者は、何故男が「鍋」の歌を女に遣ったのか、ということがスムーズに理解できる。ところが、「筑摩祭」について、『中河訳』は解説を行っていないかった。

そこで、豊子愷記念館に所蔵されている『王朝物語集』(一)を見ると、六十六頁(『中河訳』第百二十話)に、(図6)が示しているような書き入れがなされていた。



(図6)

歌の現代語訳中の「鍋祭り」に傍線を引いて、右の余白に細長く二行に亘って、「鍋祭(祭電神)筑摩有神社、供奉御厨之神。毎年五月八日舉行鍋祭。随従神輿的婦人頭戴紙制之鍋。有幾個关系的男人、戴幾個鍋。此为有名的奇習。【鍋祭(御厨神祭) 筑摩に御厨神を奉る神社がある。毎年五月八日に、鍋祭りが行われる。神輿に従う婦人達が紙で作った鍋を頭にかぶる。何人の男と関係したか、その数の鍋をかぶる。これは、有名な奇習である。】」と書き入れており、その左下に括弧で「広辞苑筑摩条」と記されている。

そこで、『広辞苑』の「筑摩」の条を見ると、

筑摩に鎮座する筑摩神社の祭事。五月八日に行われた。筑摩鍋の奇習で名高く、神輿に従う婦人が関係を結んだ男の数だけの鍋をかぶったというが、今は十二、三歳の少女十二、三人が下げ髪に狩衣、緋の袴をつけ、紙製の鍋をかぶり、鍋取りをさげて供奉する。鍋祭。

とあり、豊はこの『広辞苑』の解説を参照して脚注に付したものと分かる。ただ、豊は「鍋祭」を中国の「御厨神祭」と理解しているらしいが、「鍋祭」は「御厨神祭」とは違う。

このように、「原注」と記さなかった『豊訳』の四例の脚注は、『広辞苑』等の辞書から参照して付したものであった<sup>(4)</sup>。

ここで注意すべきは、『中河訳』の書き入れと、『豊訳』の脚注における措辞の相違である。『広辞苑』「筑摩鍋の奇習で名高く」の「奇習」を、書き入れでは「奇習」(奇習)と直訳するが、『豊訳』では「奇怪な風習」(奇怪風俗)と訳している。中国語で、「奇習」は普通は使わない言葉であり、中国の読者から言えば理解しにくい表現である。それを、『豊訳』では、「奇怪な風習」と訳し直したわけである。このような措辞の選択は、豊子愷の翻訳作業の推敲の過程を示す。更に、『中河訳』にない解説を、辞書を調べて脚注に付した行為は、彼が常に読者を意識して翻訳することを示唆する。これは、彼の第三話と第六話に付された後人注記の処理からも垣間見られたことであった。

このような、後人注記と脚注に見られる豊子愷の工夫は、彼が『王朝物語集』(一)に収録される『中河訳』のみを参照して、『伊勢物語』を訳出したことを物語っている。また、翻訳に取り組んだ一九七〇年

代当時、豊子愷が『伊勢物語』の訳注書を一冊に限らず、さらに入手できる環境に恵まれていたとすれば、彼は脚注を増やす等、一段と読みやすい『伊勢物語』の中国語訳を完成させたかと思われる。

## 注

- 1 拙稿「豊子愷『源氏物語』中国注釈の舞台裏」『語文研究』第百七号、二〇〇九年
- 2 浙江文芸出版社、一九九二年。本稿は一九九六年刊に拠る。
- 3 豊子愷訳『伊勢物語』のテキストはこれによる。
- 4 豊一吟『夢に縁縁堂に帰る』(東方出版中心、二〇一〇年)。初筆は一九八五年である。「縁縁堂」は豊子愷の旧居の名称であるが、一九八五年に再建されて、今日では豊子愷記念館の一部分になっている。
- 5 『伊勢物語』に関しての豊子愷の書き入れは今の解釈と違うが、これは豊子愷によるものではない。その点については後述する。
- 6 二〇〇八年に上海訳文出版社から出版された豊子愷訳『落窪物語』には、『竹取物語』等の三作品の図が見えない。更に、見開き扉に記されていた、豊子愷が一九五九年刊の『王朝物語集』(一)を参照して訳を完成したという記事も削除されていた。
- 7 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』(有精堂、一九五八—一九六一年)。天福本『伊勢物語』のテキストはこれに拠る。
- 8 天福本以外の『伊勢物語』のテキストはこれに拠る。
- 9 『訳注』は昭和二十八年に初版が出た後、それ以降も続続と版が重ねられた。確認できた範囲で言えば、昭和二十八年(初版)、昭和二十九年(三版)、昭和三十二年(八版)、昭和三十七年(十五版)、昭和四十一年(二十一版)、昭和

四十五年(二十八版)、昭和四十六年(二十九版)、昭和五十年(三十六版)、昭和五十三年(三十九版)に刊行されたものである。本文及びその本文に付されている脚注は一致するものの、現代語訳は刊行年によって、異同が見られた。

例えば、前掲の第八十一話の箇所を、昭和二十九年刊の三版でも、

ところで今狩りに来てある交野といふ所の渚の院の梅が一入奥床しく風情があった。

のように、初版と同じく本文の「梅」を「梅」と誤訳している。昭和三十二年の八版でも同様であった。

ところが、昭和三十七年の十五版では、「桜」と訳されていて、以下、昭和四十五年の二十八版、昭和四十六年の二十九版、昭和五十年の三十六版、昭和五十三年の三十九版も同じく「桜」であった。

つまり、『訳注』の現代語訳の「梅」は「桜」とすべきものの誤訳であるが、この誤訳は初版から少なくとも現在確認できる昭和三十三年の八版まで続く。そして、この誤訳はその間、昭和三十一年に出版された『王朝物語集』(一)の『中河訳』に引き継がれていたのである。

昭和二十九年、昭和三十一年、昭和三十三年に出版された『訳注』の本文に「むかしもかかる事は、世のことわりにやありけむ。」という評があるものの、現代語訳には評が訳されていない。ところが、昭和四十一年に出版された『訳注』の現代語訳には、

昔も身分のちがふ人が恋をして苦しい思ひをしてゐる。そんなことも世の中の常といふものであらうか。

のように、評が訳されている。

注9に列挙した、確認できた『訳注』の範囲では、昭和四十一年以降に出版されたものにはすべて評が訳出されている。昭和三十一年刊の『王朝物語集』(一)に収録されている『中河訳』に評が訳されていないのは、その基となる

『訳注』の現代語訳に評が訳されていなかったためである。

11 『群像』(第四十二巻、第三号)

12 この点については別稿に譲りたい。

13 『中河訳』を参照して付した残りの六箇所の脚注については、「付録(一)」に詳述した。ただし、『中河訳』にはすでに述べたように、八箇所の注解が付されているが、豊は七箇所しか訳していない。豊が訳さなかったのは第一話の「むかし」についての注解である。これは、中国の読者にも分かる範囲のものだと判断して訳さなかったかと思われる。

14 新村出(岩波書店、昭和三十年)。注5において、『伊勢物語』についての豊子愷の解説が不自然だと述べたが、その解説は『広辞苑』によるものであった。

『広辞苑』は刊行年によって、内容に若干の変化が見られるが、昭和三十年刊の内容はかなり特異なものであった。これが、『伊勢物語』についての豊の書き入れに反映したのである。

15 注14の『広辞苑』は豊一吟が所蔵していた。豊子愷記念館には、新村出『言苑』(博文館、昭和十三年)と金沢庄三郎『広辞林』(三省堂、出版年未詳)という二書があった。『豊訳』に「原注」と示さなかった四例中、「筑摩祭」を除く三例については「付録(二)」に詳述した。

## 【付録(一)】

第六話 「いとこの女御」

(豊 訳) 堂妹女御―藤原良房の娘の明子、是文徳天皇の女御、清和天皇の母后。这物語是想象性的。国史大辞典中说、「在原业平看见良房欲将高子(二十二岁)送入宫中去当清和天皇(十四岁)的后室，欲设法拦阻，便和高子私通，诱她到五条宫来，出奔宫外。基经(良房之养子，高子之兄)等大怒，把业平的发髻剪去，驱逐到东郡。」

—原注

【従妹の女御―藤原良房の娘の明子は、文徳天皇の女御であり、また清和天皇の母である。この物語は虚構のものである。国史大辞典によると、「在原業平は良房が娘の高子(二十二歳)を清和天皇(十四歳)の後宮に入内させようとすることを推察し、それを邪魔しようと思つて、高子と密かに通じた。そして、五条の宮に誘つてきて、宮から連れ出した。基经(良房の養子で、高子の兄である。)等が大いに怒つて、業平の髻を切り、東国に追い出した。」—原注による。】

(中河訳)

(注) 「いとこの女御」―藤原良房の女明子、文徳天皇の女御、清和天皇の御母。この物語を想像せしめるものとして、国史大辞典曰く「良房が高子(二十二歳)を清和天皇(十四歳)の後室にいれんとするを見、業平はこれを妨げんことを謀り、ひそかに高子と通じ、かつ五条の宮にあるを誘いて宮外に奔る。基经(良房の養子、高子の兄)等大いに怒り、業平のもとどりを切りて東国に逐う」

※右の豊の脚注には三箇所の間違いがある。

一つ目は、「いとこの女御」を豊は「従妹の女御」(堂妹女御)と訳しているが、ここで、「いとこの女御」は明子であるから、二条の後である高子から言えば「従姉の女御」になる。ただ、豊は第六話の後人注記の訳においては、「従姉の女御」と記している(本稿の八頁)から、ここは誤記だろう。

二つ目は、『中河訳』「この物語を想像せしめるものとして」の「想像せしめる」を、豊は「想像したもの、つまり虚構のもの」だと理解して、「この物語は虚構のものである」(这物語是想象性的)と誤訳している。

三つ目は、『中河訳』「五条の宮にあるを誘いて宮外に奔る」を、豊は、「五条の宮に誘つてきて、宮から連れ出した」のように、高子が宮中にいたのを、五条の宮



に連れ出してきたと誤訳している。

第二十八話 「皇太子の御母の女御」、「近衛府の官人」

(豊 訳) ・皇太子の母后的宮女、乃暗指清和天皇の宮女、即二条的皇后高子。

—原注

【皇太子の母の宮女は、清和天皇の宮女を暗示する。即ち、二条后の高子である。—原注による。】

・近卫府の官人、近卫是宮中の武官。乃暗指在原業平。—原注

【近衛府の官人は、近衛は宮中の武官であるが、在原業平を暗示する。—原注による。】

(中河 訳) (注) 「皇太子の御母の女御」—清和天皇の女御、二条の後、高子を暗示せるなるべし。

(注) 「近衛府の官人」—近衛は宮中の武官。ここでは暗に業平を暗示せるなるべし。

※豊は『中河訳』「皇太子の御母の女御」と「清和天皇の女御」の「女御」を、「宮女」と訳している。中国語の「女御」は、唐の時代から既に普通の「宮女」という意味になるが、しかし、日本語の「女御」は普通の宮女ではなく、皇后・中宮の次になる高位の女官である。

第八十一話 「惟喬親王」

(豊 訳) 惟乔亲王是文德天皇的第一皇子。其母乃纪有常之妹静子，因此这位亲王和在原业平是堂兄弟，后来因藤原氏占据皇位，这位皇子在

小野山里地方闲居以终。—原注

【惟喬親王は文德天皇の第一皇子である。その母は紀有常の妹の静子である。よってこの親王と在原業平は従兄弟である。藤原氏

が皇位についたので、後にこの皇子は小野の山里に閑居し、一生を終えている。—原注による。】

(中河 訳)

(注) 「惟喬親王」—文德天皇第一皇子。御母は紀有常の妹静子、従って業平とは従兄弟、後藤原氏のために皇位を遮られ小野の山里に閑居。

※『中河訳』の「藤原氏のために皇位を遮られ」とは、文德天皇の第四皇子である清和天皇の外祖父の藤原良房によって、第一皇子である惟喬親王が皇位につけなかったことを指すが、豊は「藤原氏が皇位についたので」(因藤原氏占据皇位)と誤訳している。

第二百二話 「深草の帝」

(豊 訳) 深草帝即仁明天皇。—原注

【深草帝、即ち、仁明天皇である。—原注による。】

(中河 訳) (注) 「深草の帝」—仁明天皇。

第二百五話 「契沖の評」

(豊 訳) 契冲评此诗，曰：『后人吟虚伪的辞世之歌及悟道之诗，皆是伪善，甚为可惜。业平一生的诚意，表现在此诗中，显示着后人一生的虚

例。』此言甚是中肯。—原注

【契沖は、この歌について次のように評価している。「後人が虚偽的な辞世の歌、悟りがましい道歌を詠むのは、皆偽善的なものであり、甚だ憎いものだ。業平の一生の誠意がこの歌に現れている。

これは後人の一生の虚偽を現す。」これは、正に要を得た言葉だ。—原注による。】

(中河 訳)

(注) 契沖はこの歌を批評して「後の人が虚偽的辞世の歌や悟り

がましい道歌などよむのは、偽善であつて甚だ憎い。業平は一生の誠意がこの歌に現われていて、後の人の一生の虚偽を現わしている」と述べているのは甚だ興が深い。

※『中河訳』の「業平は一生の誠意がこの歌に現われていて、後の人の一生の虚偽を現わしている」を、豊は「業平の一生の誠意がこの歌に現れている。これは後人の一生の虚偽を現す。」のように誤訳してしまった。

### 【付録 (1)】

#### 第三話 「ひじきも」

(豊 訳) 日语鹿尾菜与枕袖发音相似。

【日本語では、鹿尾菜と袖をしいては発音が相似している。】

(広辞苑) ・ひじき「引敷」 引敷物の略。引敷物―しきもの。ひじき。伊勢「ひじきものには袖をしつつも」

・ひじき「鹿尾菜」

※『広辞苑』から、鹿尾菜と引敷物が掛詞だと分かるが、『豊訳』が言う鹿尾菜と袖に関しての説明はない。この箇所は、『中河訳』の歌「おもひなくば律の宿にねもしなん ひしきものには袖をしつつも」の現代語訳―この切ない思いが私になかつたら むさくるしい律の宿に寝ても我慢できるだろうのに。夜の引き敷きものには片袖をしいて一人で寝ても堪えられるだろうのに。―を参照して付した脚注だと思われる。しかし、鹿尾菜と引敷物は掛詞であるが、鹿尾菜と袖は掛詞ではなく、袖は引敷物の縁語になる。豊の脚注は、引敷物と袖に関しての説明が足りない。

#### 第六十四話 「禁色」

(豊 訳) 从前的皇宮中、有几种颜色的衣服、只准天皇及皇族等穿着、臣下

不得服用、即深紫、深红、暗红等、名曰禁色。

【昔、宮中では天皇及び皇族にしか着用できず、臣下に許されない服色が幾つかあった。即ち、深紫、深紅、深蘇芳を禁色と言う。】  
(広辞林) 古昔、臣下の男女の着用することを禁ぜられし服飾、即ち、深紫・深紅など。

(言苑) 昔、天皇・皇族等の方々の服色を臣下が用ひることを禁ぜられたこと。即ち深紫・深緋・深蘇芳色など。(ゆるしの色の対)。

#### 第九十九話 「忘草・忍草」

(豊 訳) 日文萱草亦写作忘草，忍草是萱草的别称。

【日本語では、「萱草」を「忘草」とも書く。「忍草」は「萱草」の別称である。】

(広辞苑) ・「忍草」ワスレグサの別称。伊勢「忘草を―とやいふとて」  
・「忘草・萱草」忍草の異称。

【付記】本稿は和漢比較文学会第百三回例会(西部)(平成二十一年四月二十五日・於同志社女子大学)での口頭発表をもとに修正加筆したものです。発表の席上及び発表後、多くの方々に有益な御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

(じよ げいしゅん・本学大学院博士後期課程)